

戦前期日本ペンクラブをめぐる諸問題

目野由希

二〇〇八年十月二十六日、東北大学川内北キャンパスで開催された日本近代文学会秋季大会において、稲賀繁美氏（国際日本文化研究センター）、梶原景昭氏（国士館大学）、山本亮介氏（信州大学）、目野（国士館大学）の四人は、「戦前期日本ペンクラブをめぐる諸問題——日印文化交流と国際文化政策——」というパネル発表を行う機会を得た（以下、敬称略）。

後述のように、戦前期日本ペンクラブ、特にその国際性に於いて本格的に考察を行う場合、日本近代文学以外の専門家の協力は必須となる。二〇〇八年度現在、日本文学に関する学会で会員外のメンバーを半数までいれてパネル発表を行うにあたり、日本近代文学会は最適の場であった。

特に今回のように、日本の文化人の国際会議へのコミットメントと文化政策が考察対象となる場合、稲賀・梶原のように、

国際学会参加経験に富み、文化政策の企画者側・実践者側にいる会員外の研究者をパネルに招聘できた研究代表者は、パネル発表の方法改善の恩恵を大きく受けたこととなる。改めて、兩名と学会関係者各位に感謝したい。

各パネリストの発表題目は、以下の通りであった。

まず山本による「日本ペン倶楽部」とは何ものか？。ここで、戦前期日本ペンクラブ（一九三五—一九四五）における日本国内での活動、特にその内向きの「国際性」について、十全な資料とともに検討された。

次に、稲賀「ブエノスアイレスの雪舟、サンパウロの芭蕉——島崎藤村のブエノスアイレス国際PENクラブ参加と「最も日本的なるもの」を巡る講演の周辺（一九三六）」。当初稲賀は、「ロビンドロナト・タクル（タゴール）、ノンドロル・ボシュ（ボ

ス）と荒井寛方：二〇世紀前半のベンガルと日本の芸術的交流」というテーマでパネルに参加する旨を、グループで最初に表明した。しかしその後のグループの打合せが進み、今回は戦前期日本ペンクラブの国際対応の特徴を中心に考察することとなった。そのため稲賀は、日本ペンクラブ会長の島崎藤村による南米での活動について、発表数日前まで滞在していたブラジルで得た画像資料などを駆使しつつ、口頭発表を行った。

三番目に、目野「一九三〇年代カリダス・ナীগ論のこころみ」。ここでは、一九三六年ブエノスアイレスでの日本ペンの行動を理解するための補助線となる、ベンガルペンクラブ代表およびイギリスなどの行動を追った。

最後に、デイスカッサントの梶原が、一九三〇年代後半の日本の国内外の文化政策・文化現象としての分析や評価と同時に、現在も継続する文化政策および文化媒介者の問題としてまとめと考察を行い、会場から質疑応答を受け、パネルを終えた。

この四人の発表とまとめ・質疑により、①戦前期日本ペンクラブの概略説明と国内活動の特徴、彼等の考えた日本の文学者たちにとっての「国際」活動イメージ理解（山本）、②同クラブの最大のイベントであった、ブエノスアイレスでの国際ペン大会への出席状況とアルゼンチン・ブラジルと日本との関係、その政治および外交上の意義考察（稲賀）、③①と②の発生を齎した欧米の当時の文化政策のヘゲモニー闘争状況、イギリス・ベンガル・イタリア各国との相関（目野）、④①から③のまとめ、

および世界的なダイナミズムのなかでの日本ペンクラブ発生と展開についての再解釈の必要性の提言、今後の研究の展開（梶原）、⑤会場からの質問、という立体的な戦前期日本ペンクラブ理解ができた。

次に、各パネルの内容を確認する。

最初の発表「日本ペン倶楽部」とは何ものか？（山本）は、発表を「I 戦前期日本ペン倶楽部の概略と問題」「II 倶楽部に賭けた者：勝本清一郎の場合」「III 倶楽部に賭けた者：新居格の場合」「IV 〈コクサイ〉の名に賭けてII」の四点に分けて行った。山本は戦前期の「日本ペン倶楽部」の成立と活動概略、対内的課題と対外的位置について説明した上で、ここで重要な役割を果たしていた勝本清一郎（「日本ペン倶楽部」の国内向けスポークスマンであり、元マルキストの国際派常任理事）と新居格（国際派アナキスト）について、詳細な検討を行った。その結果、「日本ペン倶楽部」という存在に、あえて賭けてみる形で、自由主義的立場に後退した元マルキストと元アナキストが、人民戦線の機運が盛り上がるなか、日本国内に回帰しつつ、「国際性」を軸として国内でゆるやかに結びつく経過が浮き彫りにされた。

これは、左右両陣営の論客の、その後の姿として一九三〇年代的な主題であるが、それだけではなかった。むしろ山本発表は、一九三〇年代のテーマから、きわめてアクチュアリティの強い課題を発掘したようである。山本はデイスカッサントの梶

原とともに、戦前期「日本ペン倶楽部」の組織的なあいまいさや文学者達の「国際」性のある種の胡散臭さをあざやかにあぶり出すことに成功し、現在のわれわれも抱えている「文化人による「国際貢献」の胡散臭さ」の原点を指摘するに至った。例えば、「国際性」評価の政治利用については、当時の（元）左右両陣営ともに、何らかのかたちで見出せるものである。

山本のとりあげた、一九四〇年東京国際ペンクラブ大会計画への、日本国内のそれぞれ立場の異なるはずの論客らの一様な期待感・樂觀視も、興味深い内容であった。現在の日本にも通じる、日本国内からのインターナショナルな組織・国際性全般への、やや樂觀的にすぎる希望や期待については、この後の目野発表（国際ペン大会そしてイギリスを中心とする各国の、利害関係との相関）やパネル後の質疑応答（国際組織について、日本に入ってくる情報の乏しさについての稲賀発言）が、相対化して補充することとなった。

山本の引用した勝本清一郎の資料に、「国際組織というのは、要するに政治的エミグラントがモスクワへ逃避して、ほかに仕事がないのでそういうものを設立して、自からの仕事とするというもの」（「対談」ハリコフ会議のころ「文学」（一九六四年四月、山本配布資料五三））という箇所があったが、パネルの質疑応答の際、稲賀がこの「モスクワ」を「ワシントン」に交換したのに、やや近似する趣旨の発言を行ったのが印象的であった。国際人勝本の現代的な再評価作業も、今後は必要となってくるの

に属していた由を、時代背景を踏まえつつ共時的に論じた。同時に、藤村の旅路と重なる雪舟の旅路、さらに後述の万葉集歌碑から、芭蕉へといたる旅人と詩歌の系譜が言及された。

さらに稲賀発表は、サンパウロのサンタ・クルーズ地区に建設された日本病院の庭に建立された和歌の石碑に着目した。とくにこの歌碑についての分析は、当時の国際的な環境を総合的に復元しつつ、同時に、（まさに直前まで発表者が滞在していたばかりの）現在のブラジル社会との連続性が意識された内容であった。この石碑が建立された当時のブラジル国内の国粋主義の進展、「あと数ヶ月遅ければこの碑の建立は困難であった」という指摘、現地の画像を用いての詳細な説明、発表者が現地で講演した際の聴衆の反応などから立ちあがる日伯関係の絶え間ない生動には、聞く者をうならせる説得力があった。おりしも二〇〇八年は日伯交流年、日系移民移住百周年記念の年であった。

日本近代文学会では、パワーポイントなどを使用して写真から「魅せる」発表はまだ少数派ではあるが、この先は、こうした発表様式は一般化していくのではないかと思われた。

結果的に、戦前期日本ペンクラブの海外活動の特徴だけではなく、藤村の南米体験の再検討、日系ブラジル移民のコミュニティで現在まで継続していた当時の藤村らの記憶、移民時代の美術（移民船のモチーフなど）というスキームの提示など、豊かな問題提起がなされた発表であった。

ではないだろうか。

二番目の発表「ブエノスアイレスの雪舟、サンパウロの芭蕉——島崎藤村のブエノスアイレス国際PENクラブ参加と「最も日本的なるもの」を巡る講演の周辺（一九三六）」（稲賀）である。稲賀発表は、一九三六年に島崎藤村が、日本ペンクラブ代表としてブエノスアイレスにおける国際ペンクラブ大会に初出席した際、同地の日本領事館で「日本におけるもつとも典型的なるもの」として、雪舟を論じた事例にまつわるものであった。

ここではまず、これまで大東亜文学者会議での万歳の音頭などから、「体制協力者」として否定的な評価を与えられてきた晩年の藤村ではあるが、実際には一九三六年時点のブラジルやアルゼンチンでは、当時の文部省の意図ともそわない、外務省の思惑とも外れた行動をとっている点が指摘された。具体的には、一九四〇年の日伯文化交流協定締結を意識した文部省の思惑とも、当時のブラジルのナショナリズムの高まりに配慮しつつ、一九四〇年東京国際ペン大会を開催したい外務省の意図とも、いずれとも合致しない発言・講演活動・インタビューなどを南米で行っていた点である。

また、中国渡航経験をもつ雪舟を「日本におけるもつとも典型的なるもの」として南米で紹介した藤村は、当時の進實重康らによる最先端の日本美術研究を意識していた可能性が高い。その上、「山水長巻」の一般向け公開としては、南米での初めての公開というだけでなく、近代的な展覧と評価としても最初期

またこの発表は、当初二〇〇七年にリオデジャネイロで行われた国際比較文学会での発表内容を、さらに詳細に、新たな資料を加えて検討し直したものである。

藤村の南米体験に着目し、再評価するというユニークで先端的なテーマを、ブラジルにおいては英語で、国際比較文学会の場で、日本においてはさらに詳細にした内容を日本語で、日本近代文学会という場で発信するというケースであったことも、特筆しておきたい。海外の研究手法を「横のものを縦にして」移入するのでもなく、日本でしか通じない研究テーマと手法を語るのでもなく、国内と国外に同時にハイレベルな発信を可能とした力量は、稲賀という稀有な国際的研究者ならではのものであろう。

三番目の発表は、「一九三〇年代カリダス・ナグ論のこころみ」（目野）である。

カリダス・ナグ (Kaldas Nag: 一八九二—一九六六) (以下「ナグ」と表記、ベنگガル出身編集者、インド学者、東洋美術史学者、民族学学者、教育学者) の一九三〇年代の言動を追うことで、日本ペンの国際ペンクラブ参加をめぐる国際情勢理解の補助線とし、同時に、ここで展開された各国間のインターナショナルリズム/ナショナルリズムの重層性について考察を行った。

日本ペン設立は、外務省がロンドンのセンターからの要望を得て設立が開始された。これに対しインドでは、国内で成立した共産主義的文学運動団体（進歩主義作家協会成立）と対抗する

団体として、宗主国イギリスから強要されたのがベンクラブだと解釈されている。

こうした情勢下、ナーグはベンガル地域でのベン成立に尽力する。彼の回顧録では、ベンガルでは抵抗なくベンクラブのプランチが設立されたと述べられている。

当初、ナーグは一九四〇年にボンベイで国際ベン大会を開催したい要望を国際ベンに申請していた。回顧録では、一九三六年に南米大会に参加した際、アジア圏でアジア人が国際会議を開催するという東京大会のアイデア（有島生馬の演説）を聞いて意見を交え、東京に賛同したと書く。

ブエノスアイレス大会議事録を読むと、東京とボンベイが一九四〇年の次期開催都市を争い、司会で国際ベン書記長のイギリス人オールドが、日本代表とインド代表は「Reached an agreement whereby Japan has been given priority」と宣言している。しかし、その宣言の後、記録ではさらにナーグがインド招致の演説を行っているのだ。

しかも「日本ベンクラブ三十年史」では、「四〇年度の会議地については、インド側からあらかじめ自国招致の希望が本部宛に申し出されていたにもかかわらず、オールドからインドの要請は譲歩撤回されるに至ったという説明があって、日本に招来されることになった」と書く。つまり、一九四〇年大会開催地決定経緯については、日本・イギリス・インド（ベンガル）が、いずれも異なる記録を残しているのである。

最後に、一九三六年のブエノスアイレス大会で確認される英・日・印のインターナショナルイズムとは、①英国中心の宥和政策・間接統治の別名に近い意味をもつ、当時のイギリスから見たインターナショナルイズム、②連合国側との民主的・楽観的な交流手段としての、日本側から理解されたインターナショナルイズム（山本発表との関係）、③インド（ベンガル）人からみられた、枢軸国側と連合国側と同時の接触を可能とし、宗主国の影響が強い、複雑かつ高度に政治的なインターナショナルイズム（これまでの稲賀論文との関連）という、少なくとも三種の異なる性格のものであると結論づけられた。

その後、デイスカッサントの梶原景昭からのコメントがあった。本パネル発表は、グローバルとローカルの交差が重層的に主題となった発表であるが、戦前期の日本ベンクラブのような特異な団体に関し、アクターとエージェントのダイナミズムを失わずに説明する困難を、パネル発表のかたちで切り拓こうとした、と評価した。

次に、日本は（文化的にも）国粋化が進展したと一義的に言われていた一九三〇年代後半ではあるが、実際には、世界からの脱退と世界への進出が、同時に行われているとみなせる、と本発表の特徴全体を概括した。

ことに、（元）左右両陣営の論客や文化人たちが、それぞれの主張を繰り広げた一九三〇年代情勢は、いくら当時の日本がい

本件を理解するには、最終的にはより実証的な調査が必要となる。しかし、それでも①国際ベンクラブでのイギリスの文化的発言力・発信力、②一九三〇年代のイギリスの対日宥和政策、③インド（ベンガル）人の枢軸国寄りの（文化的）交渉姿勢、④英・仏・伊などによる、当時のヨーロッパ圏での、国際ベンに對抗する形での文化人による文化政策・文化発信のヘゲモニー闘争、⑤日本の文化発信国としての出遅れ、以上の五点は同時代状況の理解に必須である。これらについて目野は、ナーグ・有島生馬・芹沢光治良の残した資料、イタリアや日本の先行論を踏まえながら論じた。

残念ながら、当時までの日本の国際文化振興会や外務省ならびに日本の文学者・文化人は、「文化の擁護」（仏）、「ベンクラブ」（英）、「JAMBHO」（伊）などに拮抗しうる程の影響力をもつ、対外的な文化発信・国際文化活動を上手に展開できなかった模様である。また、ヨーロッパで伊・英・仏がどういう文化政策の闘争状況にあったか等を、生馬や日本ベンクラブだけではなく日本外務省も、よく理解できていなかったようであった。

また、ここで日本の文化政策担当者たちが垣間見た、ヨーロッパ圏内など限定された地域内・国家間での文化政策の競合は、のちの大東亜文学者会議（藤村が晩年、万歳の音頭をとる）に、その基礎的アイデアを与えたのではないかとこの仮説も示した。これは、これまで稲賀論文が提示してきた疑義の回答の一部としての仮説でもある。

インターナショナルイズムを失って国粋化していたといっても、実態としてはすでに一国史からだけでは収まらない地点までインフラ整備・外交や文化政策が進展し、国内知識人・評論家らも十分に「コクサイ」化していた。それと同時に、ブラジル日系移民対応やイギリスの宥和政策上からの徳意・イタリアからの有島生馬の公式招聘などの世界的動向とも、日本外交は無縁でいられた。これを受け、当時の日本ベンクラブ（と日本の文化情勢）理解には、世界的な位置からの見直しが必要であるとされた。

デイスカッサントの過去の経験から実感・理解できる事項としては、①カタカナの「コクサイ」の胡散臭さは、現代でもそのまま継続する問題（山本発表）、②①とは逆に、「執行者がその存在理由を把握して行動すべき）国際的ミッションないし国際貢献」であるにも関わらず、今でも当時と同じように、執行者側が正確にその意義を把握し切れていないままで執行される事例は散見される（稲賀・目野発表）。③日本の文学者・文化人、そして官僚などによる組織運営・文化発信・戦略の継続的拡大の技術的なまずさ（山本・稲賀・目野発表）。これは、一九三〇年代当時の歴史的限界にとどまる問題ではないのではないか。などが挙げられた。

デイスカッサントの直接知る具体例として、青木保文化庁長官のアセアンでの経験（文化交流事業に際して、担当官僚を定期的な人事異動というだけの理由で、途中で動かしたのは日本のみ）が

言及された。これはまさしく、日本ペンクラブ創設者のひとりである官僚・柳沢健が、人事異動というだけで同クラブへの関与を離れてしまった事例と同一である。

また、今後のパネル発表全体の調査と展開の方向性として、以下の点が示唆された。

本パネル発表は、文化人類学者で、近年、日本学術振興会賞やサントリー学芸賞ほか、数々の賞を受賞したばかりの渡辺靖の研究（『アフター・アメリカ』（慶応義塾大学出版会、二〇〇四）、『アメリカン・コミュニティ』（新潮社、二〇〇七）、『アメリカン・セクター』（岩波書店、二〇〇八））との連続性においてその意義が認められる研究である。同時に、各国の文化政策の戦略性について、近年の国際政治学などにおける国内外での研究の進捗と軌を一にしている。今回は日本、欧州および南米、ここに暫定的にコミットメントしたベンガル地方が論考対象であり、北米地域との関係は論じられなかった。しかし、渡辺が『アメリカン・セクター』など一連の論考で展開した、アメリカの文化政策による他者理解・世界認識の方法の設定などは大変参考となるため、本パネルは今後、渡辺論なども踏まえて研究を進めていくのがより望ましいのではないか、など。

パネル終了後の質疑と意見としては、次の三点が挙げられた。まず池内輝雄氏が、パネル発表における一九三〇年代の世界情勢の特徴について言及したのち、目野発表「一九三〇年代カリダス・ナーグ論のこころみ」に関して、ベンガルという地域

の特異性を指摘された。かりに一九三六年のインドに限定したとしても、ベンガルという地域は他の場所と異なり、宗主国イギリス寄りの行動をとりがちな植民地であったこと、また、このベンガルの代表者が、ボンベイというやはりイギリス的な土地での国際ペンクラブ大会主催を提案したことについて、国際ペンクラブの当時の実質的な主催者イギリスを背景として考察すべきなのは、という指摘であった。

これに目野が、ベンガルペン・イギリスペン・日本ペンの関係についての実証的な調査は、専門家と組んでの今後の課題であり、日本ペンとベンガルペンが事前に打合せしていた可能性も、現時点ではまだ否定できない、と回答。その目野の発言に対し、稲賀は日本ペンの一九四〇年東京国際ペン大会は、プエノスアイレス出発直前に登場した案件であると指摘した。またこの指摘の際、目野が中心になって用いていた、かつての英語表現「ボンベイ」という語は、現行の「ムンバイ」に訂正された。

次に中川成美氏から、当時の日本ペンクラブが、日本の軍国主義に対抗できるだけの組織であったか否かについて、各発表者はどう考えるかという主旨のご質問があった。パネルの四人からは、それほど肯定的ではない返答がそれぞれ提出された。

中川氏は、「文化の擁護」と国際ペンクラブに先行する左派文学者の国際会議、ハリコフ会議についてのご論考があるため、時間が許せば「一九三〇年ハリコフ会議からスタートする、左右

両陣営の国際作家会議の季節」についてこちらからもお尋ねしてゆくべきであったが、今回はそこまでの時間的余裕はなかった。

最後の時間を活用するかたちで、大久保喬樹氏から、藤村『東方の門』とその国際性との関係で、前作にあたる長編『夜明け前』でのフランスについて、いくつかの指摘があった。

日本近代文学

第80集

目次

貧困の逆説 ——葛西善蔵「贖物さけて」論	伊藤 博 1
戦略としての〈売文〉小説 ——芥川龍之介「怒」試論——	大西 永昭 20
「ナンセンス」の批評性 ——九三〇年前後の井伏鱒二——	滝口 明祥 36
林房雄『青年』における本文異同の戦略 ——国民文学への道——	内藤 由直 52
『少女の友』のコミュニティと川端康成『美しい旅』 ——〈障害者〉から〈満洲〉へ——	三浦 卓 67
永井荷風と占領期〈検閲〉 ——『罹災日録』を視座として——	岸川 俊太郎 83
庄野潤三作品における「樹木」と作家の転機 ——「夫婦小説」から「夕べの雲」まで——	谷川 充美 99
サド裁判論 ——濠洲蘭彦の戦術とその意義をめぐって	水川 敬章 115
安部公房『他人の顔』における身体加工 ——共同体・皮膚の言語・他者——	友田 義行 131
循環する水 ——目取真俊「水滴」論——	村上 陽子 147

岡本敬之助と九代目市川團十郎の交友 「Japan and America」 ——邦人発行の英字雑誌をめぐって——	丹羽 みさと 161 佐藤 麻衣 171
--	-------------------------

パネル発表 石原純とは誰だったのか ——パネル発表の報告と課題——	紅野 謙介 179
『共同研究報告』〈全集〉出版と読者——改造社を中心に 改造社『現代日本文学全集』の広告戦略とその実態 ——「現代日本文学全集講演映画大会」を中心に——	188 庄司 達也 189 杉山 欣也 195
昭和改元前後の『改造』 ——大衆化するメディア、広告化する『改造』 〈全集〉出版のポリテクス	山岸 郁子 198
戦前期日本ペンクラブをめぐる諸問題	目野 由希 202

日本近代文学

第80集

二〇〇九年（平成二十年）五月

日本近代文学会

日本近代文学会

展覧 閉域から脱して フラット文学論序説	綾目 広治 210 押野 武志 217
-------------------------	------------------------

イベント・レビュー 絵葉書による友情 ——「志賀直哉をめぐる人々展」および「志賀直哉宛書簡集 白樺の時代」について	山口 直孝 224
「若き久米正雄・芥川龍之介・菊池寛」展から ——第四次「新思潮」の草稿・原稿・校正刷をめぐる——	宗像 和重 228
小島信夫展（二〇〇八年六月十三日—十二月二十五日 岐阜県図書館） ——「裸木」にエロスを垣間見る	近藤 耕人 233
現代日本は「乱世」であるのか ——「堀田善衛展 スタジオジブリが描く乱世。」を観て——	日置 俊次 237
山梨県立文学館「飯田龍太展」	橋本 直 241

書評 岡野 幸江著『女たちの記憶 〈近代〉の解体と女性文学』	鈴木 正和 244
平澤 信一著『宮沢賢治《遷移》の詩学』	大沢 正善 248
池川 敬司著『宮沢賢治との接点』	藤木 直実 253
岩見 照代著『ヒロインたちの百年 文学・メディア・社会における女性像の変容』	曾根 博義 257
尾西 康充著『田村泰次郎の戦争文学——中国山西省での従軍体験から』	石川 巧 261
綾目 広治著『理論と逸脱 文学研究と政治経済・笑い・世界』	小森 陽一 265
山田 有策著『再生の近代 戦後という文体』	永井 聖剛 269
伊狩 弘著『島崎藤村小説研究』	

紹介 山崎眞紀子著『村上春樹の本文改稿研究』	山田 夏樹 273
明里千章著『村上春樹の映画記号学』	
綾目広治・大和田茂・鈴木斌編『経済・労働・格差——文学に見る』	菅本 康之 275
外村 彰編『高祖保書簡集 井上多喜三郎宛』	小関 和弘 276
大橋毅彦他編著・注釈『上海 1944—1945 武田泰淳「上海の蜃」注釈』	郭 偉 277
宇佐美毅・千田洋幸編『村上春樹と一九八〇年代』	米村 みゆき 278
島崎市誠著『論集 中野重治』	村田 裕和 279

日本近代文学

第80集

編集者 「日本近代文学会」編集委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
都留文科大学文学部 阿毛久芳研究室内

発行者 日本近代文学会 代表理事 山田有策
発行所 日本近代文学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-1-6
井上ビル6F B号室

印刷所 三美印刷株式会社

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
電話 03(3803)3131 FAX03(3805)7677

2009年（平成21年）
5月15日 発行